

月刊

地域保健

2
2009

●特集

地域で取り組む
アルコール関連問題



● FACE2009
大木幸子さん

杏林大学保健学部看護学科地域看護学教授

● FACE2009



体験からリアルになる地域への信頼感

人と人とのつながりだけでなく、暮らいや「文化」によって形成される「コミュニティ

杏林大学保健学部看護学科地域看護学教授

大木幸子 さん

新型インフルエンザなどの大型感染症が起こったとき、あるいは大規模自然災害に見舞われたとき、地域の人々の考え方や行動を想像するのは難しい。引き続くコミュニティの分断や問題の潜在化が進行すると、それまでの生活から見えなかつた現実が表出する。予想が困難な状況を前提に、保健師が踏まえておけるものとは?

保健所保健師として長く活動され、平成19年度から杏林大学で教鞭をとる大木先生に、感染症をはじめ大規模自然災害発生時における保健師とコミュニティとのかかわりについてお話を伺つた。

感染症対策における援助職としての保健師の重要性

自治体でも新型インフルエンザ対策が課題となっています。感染症対策における保健師の役割についてお聞かせください。

大木 感染症対策は公衆衛生の基本で、新しいことはないのですが、現在、食の流通や人の移動の広域化から感染症は広がり方が多様で複雑です。一見散発事例と見えたものが、実は同じ食品

を感染源とする、一定の地域における集団感染ということがあります。この

ようなケースを迅速に判断できる、その地域を知っている専門家が必要です。また、喫食調査のような当事者からの聞き取りは、ターゲットに考えている感染症の感染経路、潜伏期間、感染源と考えられる食材について情報提供

しながら振り返つてもらう作業ですが、信頼関係が必要です。思いもしない出来事に遭遇した当事者の混乱を受けとめながら、地域で起こっている問題を一緒に解決するためのパートナーシッ

プを、短いかかりの中でも築いていきます。これは保健師の相談支援技術と共通しています。調査者ではない、援助職としての側面をもつ保健師が、健康危機管理に果たす役割は大きいと思います。

新型インフルエンザ対策については、地震災害時の対策と比較検討されています。

大木 阪神・淡路大震災の発生直後、個人ボランティアとして1週間ほど現地に行きました。日ごろのコミュニティのつながりによって初期救命活動が大きく違つたそうです。避難所の運営についても、それぞれのコミュニティのそれまでの関係性が反映されることを感じました。その意味で、住民の暮らしのための地域づくりが、大規模な災害（健康危機管理）のときも機能すると思います。

p8 わが国のアルコール関連問題の現状

独立行政法人 国立病院機構 久里浜アルコール症センター 遠藤光一
同 副院長 樋口 進

p14 アルコール関連問題における保健師の役割

順天堂大学大学院医療看護学研究科特任教授 安田美彌子

p18 うつ・自殺とアルコール問題

断酒の家診療所医師 猪野亜朗

p24 飲酒運転の背景にあるアルコール問題

取材・文 編集部

お話を伺った方・特定非営利活動法人ASK代表 今成知美

p30 アルコール関連問題と家族のとらえ方

奈良女子大学生活環境学部教授 清水新二

p34 周産期とアルコール関連問題

国立成育医療センター周産期診療部産科医長 久保隆彦

p38 未成年者とアルコール関連問題

鈴木メンタルクリニック院長 鈴木健二

p42 高齢者とアルコール関連問題

荒川区福祉部高齢者福祉課高齢者保健サービス係長 与儀恵子（保健師・精神保健福祉士）

p48 アルコール依存症と関連疾患の基礎知識

慶應義塾大学看護医学部教授 加藤真三

p54 断酒会の活動について

(社)全日本断酒連盟副理事長 植松弘夫

p60 事例 島根県東出雲町

東出雲町子育て支援センター所長 米田祝子（保健師）

p66 事例 東京都世田谷区

世田谷区玉川総合支所健康づくり課保健相談係主査 遠藤厚子（保健師）

p71 事例 沖縄県粟国村

文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

特集

地域で取り組む アルコール 関連問題



アルコールの健康被害は、よく知られている依存症や肝・脾障害をはじめ、脳血管障害、がん、自殺、DV、AC、胎児への悪影響など非常に幅広い。マスコミで報じられる飲酒運転による事故もアルコール常飲者という視点からみれば、公衆衛生的な課題であるともいえる。2005年、WHOでは「アルコールの有害な使用に起因する公衆衛生問題」に対処するための決議を探討し、加盟各国および地区事務局長に政策的介入を要請した。しかし、わが国における公衆衛生分野での取り組みは同じ嗜好品であるタバコに比べると、遅れているのが現状であり、関係者のさらなる奮起が求められている。特集ではアルコール関連問題の現状を概観、地域が取り組むべき方向をまとめた。

ALCOHOL

●文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

保健所保健師だから
できることをやりたい！

一途で頑固な京女が
目指すもの



山城北保健所のある宇治市の名所といえば平等院

それは13年ほど前、京都のある小学校でのこと。放課後にストーブの前に仲の良い友達が集まり、お喋りを楽しんでいた。そこで将来何になりたいかという話題になり、それぞれに思いついた職業を口にしていると、

「恵子ちゃんは優しいから、看護婦さんに向いているんじゃない？」

誰かがふと漏らした言葉にみんながうなずいた。当の恵子ちゃんも、そう言われたことがなんだかうれしくて、看護婦さんという職業を意識するようになつた……。

よくある話ではある。でも、その恵子ちゃんが今、保健師として私の前に座つているのだから、人生は面白いものである。

ピノコに憧れた 小学生時代

京都府宇治市にある京都府山城北保健所に平成20年度に採用された小林恵子さんは、今年24歳になるひよこさんだ。とてもほんわかした雰囲気を持っているのは、生まれも育ちも京都だからだろうか。自然に出てくる京都弁が耳に心地よく響く。

「主人公の『ピノク』じゃなくて、横にちょこちょこ付いているピノコに憧れたみたいです（笑）」

ちなみに『ピノク』の持ち主は、かつては看護師、今はケアマネジャーとして働く母親だった。

「資格は持たなかんよ」

小さなころからよく言われた。別にそれで医療職を意識したつもりはないが、小さな積み重ねが小林さんを看護職に向かわせたのかもしれない。

中学生になるとソフトボール部に所属した。ほかの部よりも和気あいあいとしていて楽しそうだったし、雰囲気

冒頭で紹介したお話は、保健師になつたきっかけを聞いたときに出でてきたエピソードだ。最初に医療職を意識した原点はここにあるかもしれない。小林さんはいう。小学校高学年になると『ピノク』の漫画にも惹かれた。



式部像と一緒に。源氏物語の第三部は宇治が舞台だ